

上演9 2026年7月31日（金）4校目 開催県（秋田県） 秋田県立鹿角高等学校 『きおくのき』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 同志社高等学校（京都府） 多木 菜々子
--	--

もし忘れてしまっても、思い出は、覚えている誰かが、きっと心の中で大切ににとって置いてくれている。この作品は、心の底からそう思わせてくれるものであった。

付き合っている二人がテスト勉強をするために同じ屋根の下で二人きり！まさに高校生の青春！を凝縮したかのような展開に、観客も思わず声を出してしまう展開が何度もあった。しかし、そんな夢の時間は突如として終わりを迎える。母の帰宅、祖母の想定外の行動により、二人の関係が家族に明るみになってしまい、激しい口論へ発展してしまう。

母は、娘に対しても祖母に対しても厳しい言葉をぶつけていて、思わずこちらが目を背けてしまいたくなるほどだったが、そんな母が人目も憚らず大声をあげて泣いたシーンでは、私たちも思わず涙がこぼれた。母は、仕事や家事に加えて介護も行わなければならない、それを誰にも相談することもできなかった。その責任や重圧に耐え続け、ずっと心細かったのだと思う。祖母にとって母は、大人になっても子供の時と変わらず、同じように愛情を注いできたはずだ。そして、それは母も同じで娘や祖母に対して、言葉は厳しくても大切な家族だと思っていることが伝わってきた。

とても印象的だったのは、歌織が窓から舞い込んだ枯れ葉を大切にアルバムにしまう場面。祖母が忘れてしまった記憶も、歌織や母が忘れず大切にしていることが感じられた。人の記憶は、古いものから色あせて消えてしまう。しかし、たとえ忘れられた記憶も、誰かの心の中に残っていれば、生き続ける。枯れ葉を拾い上げ、残すことから、祖母が忘れた記憶も、歌織や母の心の中で生き続けることが感じられた。またこの場面では、夕焼け色に染まった照明が窓から差し込んでいた。差し込む夕焼け色の明かりは、恋の甘酸っぱさや、家族の絆、人の思いの温かさを表しているように感じた。

この作品では、思い出や大切な写真は「一葉、二葉」と数えるということや、祖母の記憶は落葉樹の葉のように少しずつ落ちていくことから分かるように、記憶が「木」に例えられている。タイトルである「きおくのき」は全てひらがなであるが、様々な意味で読むことができるのではないだろうか。認知症の祖母は時間が経つにつれ、生きるために必要なものだけを残し、思い出や記憶を手放してしまう。それは、冬になると葉を落とし、幹だけの姿になる木と酷似している。また、タイトルの「き」は「気持ちのき」という意味もあるのではないかという意見があった。祖母は記憶をなくしても、かつて自分の夫であった「よしかずさん」への気持ち、娘に対する思いは、変わらずに持ち続けていた。人の顔や、今現在のことを忘れてしまってもずっと心に残り続けていた。大切な人への気持ちは、時間とともに簡単に消えるものではなく、その人の心に残り続ける。そういった意味がタイトルに込められているのではないかと思う。



人は忘れていく生き物である。しかし、もし自分に記憶がなくなっても誰かが覚えている限り、その人の思いは生き続ける。そんなことを強く思わせてくれる作品だった。